

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
<p>(著書(欧文))</p> <p>1. Seven Practical Human Factors and Ergonomic Tips for Teleworking/Home-learning using Tablet/Smartphone Devices, First Edition</p> <p>Japan Human Factors and Ergonomics Society, (Ebara T and Yoshitake R (Eds.), Shimomura Y, Aoki K, Kotani K, Toriizuka T, Ishibashi M, Nakanishi M, Ouchi H, Karashima M, Matsuda F, Yamada C. K, Akamatsu M, Muraki S, Fukuzumi S, Yagi Y, <u>Shin H</u>, Kato M, and Matsuki T)</p> <p>2. *著書No.1 中国語版 七条人因与工效学 (HF/E) 提示—使用平板电脑/智能手机进行远程工作或居家学习</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2020年5月6日</p> <p>2020年</p>	<p>IEA Press (IEA : International Ergonomics Association) 総16頁</p> <p>IEA Press 2020 (IEA : International Ergonomics Association) 総14頁</p>	<p>ISBN: 978-0-9768143-5-1</p> <p>* 本著は完全なオープンソースとして公開しており、現在、国内外の国際協力を得て、多言語にて翻訳版の公開が進んでいる。中国語（+台湾）・タイ語は公開済み。そのほか、スペイン語・ポルトガル語・ロシア語・インド・ヒンドウ語などでの展開を各国人間工学会が準備中である。</p> <p>ISBN : 978-0-9768143-1-3 Author : Chinese Ergonomics Society, CES (中国人类工效学学会)</p>
<p>(著書(和文))</p> <p>1. 「緊急時における人間の基本的退避行動に関する基礎研究」(博士学位論文)</p>	<p>単著</p>	<p>2000年3月31日</p>	<p>立教大学 博士学位論文 総311頁（本文208頁、資料103頁）</p>	<p>博士論文は3部構成である。第 I 部は退避行動研究について文献調査によって、先行研究を整理し、過去の退避行動研究における問題点を明らかにした。第 II 部は、第 I 部で明らかになった退避行動研究の問題点を解決するために実験研究に基づいて論述した。第 III 部（総合所見）では、様々な環境下での退避行動特性（環境の変化による退避行動の変化、退避行動特性の若年者群と高齢者群の違い、性差など）について検討した。</p>

<p>2. 「ビジネスの心理学」8章「OA化と職場環境の変化」 （岡村一成・松浦建児・高石光一・浮谷秀一・藤田主一・戸島裕・<u>申 紅仙</u>）</p>	共著	2000年4月10日	<p>八千代出版 担当章：8章 171-197章「OA化と職場環境の変化」 （171-197頁）総27頁/224頁</p>	<p>「OA化と職場環境の変化」 コンピュータを主軸とした、オフィスオートメーション化（OA化）が進む中、作業環境の変化に伴い、作業者にかかわる環境にも変化がもたらされた。とりわけ注目すべきは、体力をあまり消費しないデスクワークが主流となりつつある現代、職種により作業者の精神的負担（ストレス）の強度においても多様化が見られるようになったことである。次にコンピュータ画面操作を主作業とするVDT作業従事者の眼精疲労、頸肩腕部の異常が見られるようになった。本章では、VDT作業時の作業負担を軽減させるための指針、作業空間の整備方法について人間工学的立場から提唱した。</p>
<p>3. 人間工学の百科事典 担当章：11.5 自然災害と人間工学、大島正光(監修者)、大久保暁夫(編集委員長)、共著者:著者含め94名</p>	共著	2005年3月30日	<p>丸善 11.5 自然災害と人間工学 （258-261頁）総4頁/692頁</p>	<p>11.5 自然災害と人間工学 災害時の住民の避難特性を整理し、人間工学的立場から、避難路の誘導標識のデザインについての重要なポイントを整理した。</p>
<p>4. 朝倉心理学講座13 産業・組織心理学 9章「安全と労働の質」（古川久敬・二村英幸・角山剛・柳澤さおり・高橋潔・金井篤子・杉本徹雄・<u>申 紅仙</u>・岡本浩一）</p>	共著	2006年11月25日	<p>朝倉書店 （150-172頁）総23頁/195頁</p>	<p>9章「安全と労働の質」 労働災害の減少を実現するため、適切な対策を講じる上で必要な、1)ヒューマン・エラーや意図的な不安全行動のメカニズム、2)各産業の作業特性と災害特性、3)作業特性や環境に適合した事故対策の立て方と活動方法等、理解すべき要点を整理し、個人と組織要因についても考えてみた。</p>
<p>5. 実践 産業・組織心理学【産業現場の事例を中心にして】（岸田孝弥監修，久宗周二+水野基樹 編著）共著者：酒井一博・小清水豊・下平佳江・水野有希・澁谷智久・松田貴嗣・伊藤 匠・竹内由利子・久宗周二・松本彪・勝田 亨・高橋雄三・<u>申 紅仙</u>・他</p>	共著	2007年3月1日	<p>創成社 （163-177頁）総15頁/289頁</p>	<p>12章 要旨：博多区を対象にヒヤリ・ハットおよび災害体験調査を行った。その結果、「浸水時、水圧でマンホールの蓋があいていた」などの、被害はないが重篤な結果になりえる体験が散見された。調査結果から、住民の被害に対する危険意識向上のためにヒヤリ・ハット情報が有効であることが示唆された。</p>

<p>6. よくわかる産業・組織心理学 (山口裕幸・金井篤子 編) 9章「仕事の能率と安全」共著者：山口裕幸・金井篤子・他6名、<u>申 紅仙</u></p>	共著	2007年5月1日	ミネルヴァ書房 (156-171頁) 総16頁/204頁	<p>担当授業「産業・組織心理学」で使用されるテキストを執筆した(分担執筆)。産業・組織心理学を専攻としない、または初めて学ぼうとする学生を対象に執筆した。そのため、1つのトピックを見開き2頁で収め、一覧性を高めている。</p>
<p>7. 防災の心理学 第6章「自然災害でのヒヤリ・ハット事例」共著者：首藤由紀、北村正晴、サトウタツヤ、関谷直也、大上八潮、箱田裕司、<u>申 紅仙</u>、他3名</p>	共著	2009年3月31日	東信堂 (155-170頁) 総16頁/230頁	<p>第6章「自然災害でのヒヤリ・ハット事例」福岡県博多、大分県別府、静岡県熱海などを対象に調査した、自然災害におけるヒヤリ・ハット(危なかったが怪我はなかった体験)体験事例を分析し結果を紹介しその有効性を示した。</p>
<p>8. 「産業・組織心理学ハンドブック」(産業・組織心理学会編)「緊急時の行動特性」</p>	共著 *共著者 および ハンドブック編集委員	2009年7月31日	丸善(332-335頁) 総4頁/604頁	<p>「緊急時の行動特性」火災や地震、自然災害のときに人間がとる行動について整理し、事故防止・減災のための重要な活動内容を紹介した。</p>
<p>9. 「人類働態の方法」(人類働態学会編)「マッピングによる自然災害ヒヤリ・ハットの活用方法について」共著者：全150名</p>	共著	2010年6月1日	人類働態学会編 (353-356頁) 総4頁/434頁	<p>「マッピングによる自然災害ヒヤリ・ハットの活用方法について」様々な地域を対象としたヒヤリ・ハット体験をまとめ、地図上にプロットしたものの整理し紹介した。これまで適切な避難を促すために災害体験を共有し生かすような試みは少なく、貴重な方法として示唆された。</p>
<p>10. 「交渉の心理学」(佐々木美加編著) 第3章「組織における交渉」共著者：佐々木美加、福野光輝、<u>申 紅仙</u></p>	共著	2012年11月20日	ナカニシヤ出版 (79-116頁) 総38頁/165頁	<p>第3章「組織における交渉」組織力について、リーダーシップやキャリア・ディベロップメント、稟議や根回しなどの説明を通して解いた。また大学生の今後10年間のキャリア形成の重要性を踏まえ、就職活動の問題だけではなく、キャリア発達理論に基づいた入職時に抱える問題についても整理した。</p>

<p>11. 「コミュニケーションの認知心理学」(伊東昌子編著) 第10章「エラーと認知」共著者：伊東昌子、佐々木美加、新垣紀子、山本博樹、原田悦子、青山征彦、白石将浩、仲真紀子、伊田政司、<u>申紅仙</u>、南部美砂子、松本雄一、嶋田敦夫、河崎宜史、伊東潤、堀部保弘、前田裕二</p>	共著	2013年10月20日	ナカニシヤ出版 (151-168頁) 総18頁/244頁	<p>第10章「エラーと認知」ヒューマン・エラーと不安全行動のメカニズムを整理し、事故とのつながりについて発生モデルから説明した。加えて高信頼性産業（航空、鉄道、医療、原子力など）の対策が、日常生活においても役立つものが多いことを説明し、その実施方法やリスクの考え方を整理した。応用場面として子供の事故・安全について言及した。過去の事例から得られた結論として、親・教育・製品のデザイン・社会の関わりと共に、リスク教育・トータルバランスを踏まえた考え方を身につけることの重要性を提案した。</p>
<p>12. 「職務分析と作業研究」（「産業・組織心理学」ISBN 9784561266839 第11章）</p>	共著	2017年1月16日	白桃書房(222-243頁) 総22頁/306頁	<p>テーラーの科学的管理法に始まる作業研究の歴史を整理し、現代にも通じる効果的な作業改善方法を紹介した。また職務分析の手法も紹介し、職場での作業効率と雇用問題について分かりやすく解説した。</p>
<p>13. 「エラーとリスク管理」（仕事と心理学シリーズ「産業・組織心理学」第5章）太田信夫（監修）、金井篤子（編集）共著者:金井篤子、岡田昌毅、坂田桐子、永野光朗、<u>申紅仙</u>、久保真人</p>	共著	2017年7月1日	北大路書房(81-116頁) 総36頁/147頁	<p>ヒューマン・エラーについて分かりやすく解説し、エラーと事故防止対策・リスク管理の手法の関係を整理した。大規模な事故が減少していく今日、若い世代のリスク経験値が乏しくなっている可能性が指摘されている。この経験値低下によって、有事において柔軟に対応できなくなることが危惧されている。これらの問題を解消するためにノン・テクニカルスキルについても活用方法を紹介した。</p>
<p>14. 「第7章労働安全衛生実践と研究の歴史と展望」産業・組織心理学会35周年記念出版企画（第4巻「よりよい仕事のための心理学——安全で効率的な作業と心身の健康」）*発行後に著者数記入予定(300名前</p>	共著	2019年12月1日	北大路書房(175-205頁) 総31頁/276頁	<p>戦後から約50年にわたる労働安全衛生活動と事故特性、研究の潮流をまとめた上で、今後のダイバーシティ経営時代における労働安全衛生の問題点を指摘した。</p>

<p>15. (原著(英語)日本語版) 「タブレット・スマートフォンなどを用いて在宅ワーク/在宅学習を行う際に実践したい7つの人間工学ヒント」 一般社団法人日本人間工学会、榎原毅・吉武良治(編)、下村義弘、青木和夫、鳥居塚崇、小谷賢太郎、石橋基範、中西美和、大内啓子、辛島光彦、松田文字、山田クリス孝介、赤松幹之、村木里志、福住伸一、八木佳子、申紅仙、加藤麻</p> <p>16. 応用心理学ハンドブック</p> <p>17. 「総説：災害心理学とは」((再掲)応用心理学ハンドブック第15章災害心理学)</p>	<p>共著</p> <p>編集委員 (第15章災害心理学担当)</p> <p>共著</p>	<p>2020年6月23日</p> <p>2022年9月30日</p> <p>2022年9月30日</p>	<p>出版社：The IEA Press (IEA: International Ergonomics Association 国際人間工学会) ISBN: 978-0-9768143-3-7 発行者：一般社団法人日本人間工学会 総16頁</p> <p>『応用心理学ハンドブック』、日本応用心理学会、福村出版</p> <p>『応用心理学ハンドブック』15章、総2頁、日本応用心理学会、福村出版</p>	<p>リモートワーク・在宅ワークおよび在宅学習時に懸念される身体およびメンタルへの負担を紹介し、負担軽減のために実践したい方法を7つにまとめた。いずれも日常生活で気軽に取り入れられるものであり、アジアを中心に各国で翻訳版が普及している。</p> <p>応用心理学の全ての領域を網羅したハンドブック。第15章災害と応用心理学の編集を務めた。</p> <p>15章総説では、災害防止を心理学的視点から整理し、研究テーマと現状を紹介した。 *応用心理学の全ての領域を網羅したハンドブック。第15章災害と応用心理学の編集を務めた。</p>
<p>(学術論文(欧文))</p> <p>1. “A Brand-New Risk in Japan?—Risks of Industrial Accidents in the Age of Diversity Management and Their Countermeasures”.</p>	<p>単著</p>	<p>2018年8月</p>	<p>Published by Springer, Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018) pp 363-369 (総7頁)</p>	<p>ダイバーシティ経営時代の労働安全リスクの中、女性活躍について重点的にまとめた。科学研究費で調査を行った親として子どもへの影響やキャリアについて分析結果を報告した。親が抱く子どもへの影響度と不安について子どもの年齢条件と共に調べた。その結果、子どもが小学生の時に最も影響度を感じており、同時期に最も高い不安を示した。今後のキャリア形成において参考とすべき問題をまとめた。*同タイトルで国際学会で発表した。</p>

<p>2. “How to turn ‘Hiyari-Hatto (incident) experiences’ to practical use as a countermeasure in natural disasters”</p>	<p>単著</p>	<p>改稿準備中</p>	<p>Human Ergology 人類働態学会英文誌</p>	<p>自然災害における体験を共有するに当たり体験を地図にマッピングする方法が有効である。本論文ではその具体的な作成方法と留意点を整理しその成果を報告した。</p>
<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 潜在的利き特性から見た退避行動 – バーチャル・リアリティを使用したの実験的研究 – (修士論文)</p> <p>2. 「潜在的利き性からみた退避行動」 (「学会奨励賞」受賞論文)</p> <p>3. 「リスク認知に関する一研究 – 原子力発電所所在地住民の原子力発電に対する態度 –」 (申紅仙・正田亘)</p> <p>4. 「五感を活用した安全教育プログラムの開発・実施とその効果 – プログラム実施前後の職長・作業員の意識の変化について</p> <p>5. 医薬品名の類似性と取り違えミスの関係 : 学生と薬剤師を対象とした実験からの検討 (山出康代、芳賀繁、土屋文人、申紅仙)</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p> <p>共著</p>	<p>1997年3月31日</p> <p>1998年11月31日</p> <p>2000年8月29日</p> <p>2001年9月30日</p> <p>2006年3月1日</p>	<p>立教大学 総270頁 (本文196頁、資料74頁) * *:B5版で300字/頁</p> <p>応用心理学研究、第24号、1-8頁</p> <p>人間工学、 Vol.36, No.4, 215-221頁</p> <p>産業・組織心理学研究 Vol.15, No.1, 65-72頁</p> <p>認知科学、 Vol.13, No.1, 80-95頁、総16頁</p>	<p>人間の緊急時の避難行動の特性を検討した。実験装置にはヴァーチャルリアリティを用いた。被験者約100名。その結果、退避方向と利き性との関連が見出され、特に潜在的利き性との関係が示唆された。また、実験結果の有効性を求めるため、過去の研究との比較も行った。</p> <p>本研究では退避行動の実験によって被験者の退避方向と現象的利き性、また潜在的利き性との関係を検討した上で、現象的利き性よりも潜在的利き性との関係が深いことを見出した。この結果は、これまでの研究では解明されていなかった退避方向の予測の可能性を示唆するものであった。</p> <p>原子力発電所所在地住民の原子力発電に対する態度を調査した。その結果、同じ原子力発電所所在地住民でも新潟県柏崎住民の原子力発電に対する意識は強く、福島県双葉郡在住者では比較的強い賛成態度が見られた。また、年代別に見ると、地域に関係なく40-50代の強い反対態度が見られた。</p> <p>安全教育プログラムの開発に至った経過及びプログラム内容、実施効果をまとめた。結果としては、職場の雰囲気及び安全意識に対する評価が高くなり、職場の雰囲気の項目では有意差が得られ、実施効果が認められた。</p> <p>医療過誤の原因において、投薬ミスは4割を占めるといわれており、1990年代後期から2000年にかけては首位であった。これは医療従事者だけの原因ではなく、人間の見誤りやすさといった認知心理学的や安全心理学、人間工学的な見地から調べる必要があった。本研究では、医薬品名の類似性について大学生と薬剤師のエラー傾向を比較・検討した。</p>

<p>6. 「参加型アプローチに基づく人間工学ロードマップ策定ステップの検討」 (大橋智樹・榎原毅・中紅仙・水野基樹・堀野定雄・小木和孝・酒井一博・岸田孝弥)</p> <p>7. 「With/Afterコロナ時代の安全衛生と事業継続を考える(特別寄稿論文)」</p>	<p>共著</p> <p>単著</p>	<p>2009年5月10日</p> <p>2021年7月1日</p>	<p>労働科学、85巻 2号、73-88頁、総16頁</p> <p>産業・組織心理学研究 第35巻、第1号、pp49-60、総12頁</p>	<p>ロードマップとは、ある目標を設定し、長期および中期・短期間において解決すべき問題点と実行すべき行動を整理したものである。しかし、産・官・学ではそれぞれの立場が異なるために策定方法に違いが指摘されている。本研究では、アカデミックなロードマップ策定方法として参加型アプローチを推奨し、実際の実施結果を踏まえながらその有効性を示した。</p> <p>コロナ禍における労働災害を調べ、今後のリスクを整理し、その対策を共有した。特徴的な調査結果から、建設業・教育・医療などの、ある特定の領域の労働人口低下が著しいことがわかった。特に建設業は死亡災害がもっとも深刻となっている産業であり、今後も抜本的な対策が求められることが明らかとなった。また、ダイバーシティ経営が推進される中、ダイバーシティの要素である、女性活躍、後期高齢者の活躍の場、ジェンダー、チャレンジドパーソンなどの立場と、事故発生件数の高い産業に焦点を当て、おのこの事故リスクを整理し共有した。</p>
<p>(紀要論文)</p> <p>1. (査読有り) 「退避行動に関する実験的研究ーパーティシャル・リアリティを使用してー」</p> <p>2. (査読有り) 「緊急時における人間の基本的退避行動に関する基礎研究」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>1998年3月31日</p> <p>2001年3月31日</p>	<p>立教大学心理学科研究年報、第40号、105-111頁、総7頁</p> <p>立教大学心理学研究 第43号、71-75頁</p>	<p>修士論文の一部を再構成し、紀要論文に掲載した。退避方向と利き性との関連が見出され、特に潜在的利き性との関係が示唆された。また、実験結果の有効性を求めるため、過去の研究との比較も行った。</p> <p>博士論文要旨。本論文は3部構成である。第Ⅰ部は退避行動研究について文献調査によって、先行研究の流れを整理し、過去の退避行動研究における問題点を明らかにした。第Ⅱ部は、第Ⅰ部で明らかになった退避行動研究の問題点を解決するために実験研究に基づいて論述した。第Ⅲ部(総合所見)では、様々な環境下での退避行動特性(環境の変化による退避行動の変化、退避行動特性の若年者群と高齢者群の違い、性差など)について検討した。</p>

<p>3. (査読有り) 「郡山市におけるヒヤリ・ハット体験調査結果」 (申 紅仙・中根和郎)</p>	<p>共著</p>	<p>2003年6月30日</p>	<p>防災科学研究所研究資料, 第243号, 85-96.</p>	<p>自然災害におけるヒヤリ・ハットの有無を調べるため、郡山市を対象に調査を行った。その結果、有益な体験が回収された。それらの多くは外出中や避難所へ向かう途中に体験するものが多かった。</p>
<p>4. (査読有り) 「自然災害時におけるヒヤリ・ハット発生状況－岩手県釜石市および山口県宇部市調査報告－」 (申 紅仙・中根和郎)</p>	<p>共著</p>	<p>2004年3月31日</p>	<p>防災科学研究所研究報告, 第65号, 119-146.</p>	<p>自然災害におけるヒヤリ・ハット体験の特性と活用方法を探るため、釜石市と宇部市におけるヒヤリ・ハット体験調査を行った。回収された体験には、側溝が分からず転ぶなどの危ない体験に関する原因はいくつか考えられたが、視界が限られた環境下での避難・移動することの危険性が強く示唆された。</p>
<p>5. (査読有り) 「自然災害時における災害対応と防災担当者の意思決定について－2003年8月台風10号による北海道日高地方被災状況からみる一考察－」 (鈴木 勇、申 紅仙・中根和郎)</p>	<p>共著</p>	<p>2006年3月31日</p>	<p>主要災害調査, 第39号 (2003年8月台風10号北海道日高地方水害調査報告), 27-44.</p>	<p>2003年8月9日から10日に発生した台風10号による北海道日高地方への甚大な被害から、当時の行政の対応の諸問題について整理した。その結果、防災担当者の避難対応の遅さだけではなく、防災担当者の負うべき責任の範疇を超えた「防災システムの未整備」ともいえる問題：情報の過度の集中、防災に関わる機関との情報の断絶と不作為、機器類の不備と不使用などが明らかとなった。今後の課題として、他産業で行われている事故防止対策に基づいた防災に関わる対策を様々な側面から整理した。*本論文は、鈴木勇と申 紅仙の共同執筆であり、主に1-3章までの災害対応については鈴木が、4章-結語までの防災担当者の意思決定および今後の災害対策については申が担当し、後に両者で全体を整理した。</p>
<p>6. 「視線によるウェブ・ユーザビリティ評価」 (申 紅仙・伊田政司・渡邊孝憲他)</p>	<p>共著</p>	<p>2010年3月</p>	<p>人間科学 28(2), 85-93頁, 総9頁 (常磐大学人間科学部紀要)</p>	<p>高校生4名および常磐大生5名を対象に、大学ホームページを使用してもらい、反応時間、視線分析およびアンケート結果から使いやすさを検証した。その結果、高校生の探索時間が大学生に比べて素早く、大学生はアクセス経験があるにもかかわらず探索時間に個人差が大きく、望外にかかる傾向が見られた。</p>

7. 被災地から(3)茨城県における被災状況と防災・減災対策の課題: 県民調査から見えてきた多くの問題と課題	単著	2012年3月	労働の科学 67(3), 178-182, 総5頁	東日本大震災時における、有事の際に必要な情報と物資について報告した(茨城県および大学合同調査結果)。災害時、最も必要とされたものは安否確認であり、次に災害情報であった。また避難物資の中でもこれまで必須と思われていた食料よりも飲料水や通信機器、移動のためのガソリンに対する要求が高い地域も見られた。今後災害時の物資確保に役立つ情報となった。
8. 「放射線リスク不安とその対応に関する一研究: 就学前児童の保護者を対象に」	単著	2013年3月1日	人間科学 30(2), 125-131頁, 総7頁 (常磐大学人間科学部紀要)	幼稚園児の保護者を対象に放射線リスクに関する調査を行った。発電所事故から現在(2011年11月現在)に至るまで行っている行動に「野菜をしっかりと洗う」など食品関連の行動が多かった。他方、外部機関への働きかけなどの実施率は極めて低く、その両面性が明らかとなった。
9. 「視線によるロールシャッハ刺激の評価特性と投影結果について」 共著者: 馬場久美子・申 紅仙、伊田政司・渡邊孝憲・伊東昌子・島田茂樹・西澤弘行・中村泰之	共著	2014年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第8号, 2014, 19-28頁、総10頁	ロールシャッハ刺激に対する投影結果と視線停留特性の比較を行った。参加者は大学生18名、非接触型アイカメラ使用。全体傾向として、刺激中央部への停留傾向が見られ、中央部にインクプロットがあるときには特に強い傾向が示された。またどのように見えるか(クマ、蝶など)によって停留箇所の違いが確認された。
10. 「日常生活の中で見られる大学生の不安全行動とリスク評価に関する一考察」	単著	2014年10月20日	人間科学 32(1), 23-28、総9頁 (常磐大学人間科学部紀要)	大学生の日常生活で見られる不安全行動の実行率と危険認知度を調べた。その結果、危険認知度と実行率に負の相関が見られた。また、携帯電話に関わる不安全行動に対する実行率が高く、リスク認知レベルが低いことが明らかとなった。
11. 「大学生アルバイトと事故リスクについて: ヒヤリ・ハットおよび怪我事例から考える」	単著	2015年9月30日	人間科学 33(1), 13-21頁、総9頁 (常磐大学人間科学部紀要)	大学生アルバイトの勤務状況及び事故リスクについて調べた。ヒヤリ・ハット体験および怪我体験は自由記述によって収集した。報告数から見て、事故リスクの高い職種は「飲食業」と「小売業」であった。また、記述内容の特徴から「飲食業」の潜在的リスクが高く、「小売業」は顕在的リスクが高いことが明らかとなった。

<p>12. 「大学構内は子どもにとって安全か？：子どものヒヤリ・ハット体験から考える」</p> <p>13. 「ダイバーシティ（多様性）経営時代の労災リスクと今後の事故防止活動を考える」</p> <p>14. 「災害リスクを考えるー正しく怖がり、正しく行動をとるために出来ること」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>2016年3月</p> <p>2018年3月</p> <p>2018年3月</p>	<p>人間科学 33(2),33-41 総9頁 (常磐大学人間科学部紀要)</p> <p>立教大学心理学研究 60号 (pp15-28、総14頁)</p> <p>モチベーション研究 第7号 (東京未来大学) 2018, 60-69頁 (総10頁)</p>	<p>幼稚園児を中心とした幼児のヒヤリ・ハット体験および怪我体験を整理した。主に大学構内での体験を対象に解析し、体験場所を地図上にプロットし情報を共有しやすくした。</p> <p>日本における労働人口の低下から懸念される問題を安全管理の視点から整理した。またダイバーシティ経営時代において今後考慮すべき事故リスクとその対策、多様な職員の教育方法や職務の効果的な学習のためのコミュニケーションの取り方なども提案した。</p> <p>東京未来大学モチベーション研究所第10回フォーラム講演報告をまとめた。災害時の人間の行動特性、リスク認知特性などを紹介し、防災において重要な自助・共助・公助と行政の防災についてまとめた。60-69頁 (総10頁)</p>
<p>(辞書・翻訳書等)</p> <p>1. 人間工学の百科事典 (再掲)</p>	<p>共著</p>	<p>2005年3月</p>	<p>丸善</p>	<p>11.5 自然災害と人間工学 災害時の住民の避難特性を整理し、人間工学的立場から、避難路の誘導標識のデザインについての重要なポイントを整理した。</p>
<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. <DVD> 医療事故防止マニュアル(全5巻)</p> <p>2. <雑誌寄稿論文> 「安全意識向上のための体感的体験学習の実施効果」(正田 亘・申 紅仙)</p> <p>3. <雑誌寄稿論文> 「現代若者考」</p>	<p>共同制作</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>2003年 (平成15年)</p> <p>1998年5月 (平成8年)</p> <p>1999年1月～12月 (平成9年)</p>	<p>安井電子出版</p> <p>電気評論、1998年5月号、24-28頁 総5頁(24-28頁)</p> <p>安全衛生のひろば、1999年1月号～12月号 (月刊誌1年連載) 総24頁 (毎月2頁×12ヶ月)</p>	<p>指導：嶋森好子、監修：芳賀繁、申紅仙、福留はるみ、増子ひさ江、松月みどり、山本千恵美、由井尚美 医療従事者のための事故防止教育マニュアルを作成した。</p> <p>(正田 亘、申 紅仙) 独自に開発した安全教育の効果測定結果を報告した。</p> <p>若年層と中高年の考えや価値観の違いについて社会心理学や認知心理学の視点から解説した。</p>

4. <雑誌寄稿論文> 「ヒューマンエラー はこうして防ぐ」	单著	2009年1月～3月 (平成19年)	安全と健康、2009年1 月号～3月号 総9頁 (毎月3頁×3ヶ 月)	ヒューマンエラーについての用語説 明とともに事故防止方法について分か りやすく解説した。
5. <雑誌寄稿論文> 「特集 いざという 時の心理学」	单著	2010年9月 (平成20年)	中央労働災害防止協 会 安全衛生のひろば 51(9), 9-20頁,総12頁	緊急時における人間の行動特性と火 災・自然災害などの有事に行うべき行 動を説明した。災害時の対策は原則、 早めの避難につぎすが、実際には適切 な避難がなされることは少ない。リス ク認知の特性の説明と共に早めに避難 することの有効性を説いた。
6. <講演会報告> 「自然災害と人間工 学」(人間工学専門家 認定機構講演会2011 年4月22日開催)	单著	2011年5月13日 (講演は4月22 日)	人間工学専門家認定 機構 会報 Vol.27,1- 4頁	2011年東日本大震災の被害状況説明と 今後のリスクについて、また人間工学 が貢献できる問題について整理した。
7. <研究会報告> 「東日本大震災被災 者の経験から (3) ～ 茨城県 (水戸市を中 心に) ～」	单著	2011年12月	産業・組織心理学会 第103回作業部門研究 会 「東日本大震災 被災者の経験から」 産業・組織心理学研 究 Vol.26(2) 177- 産業・組織心理学研 究 25(2), 161-163 頁、総2頁	被災地域の研究者として、地域の状況 をどのように捉え復興に役立てていく のか。といったテーマによって茨城県 での活動を中心に話題提供を行った。
8. <学会シンポジウム 話題提供論文> 「災害現場に入る(第 99回部門別研究会報 告(作業部門)現場を 探す・現場に入る:成 功体験・失敗体験か らそのノウハウを学	单著	2012年2月 (平成22年)	産業・組織心理学研 究 25(2), 161-163 頁、総2頁	災害調査を行う際、被災地での調査 を円滑に行えるようにすることがとて も大事である。本論文では、フィール ド調査を行う際に、連絡の取り方から 始まってフィードバックに至るまでの 成功事例および失敗事例を踏まえて紹 介した。
9. <雑誌寄稿論文> 自然災害時の避難行 動と自動車利用の問 題について	单著	2012年9月 (平成24年)	高速道路と自動車(時 評)、2012年9月号	東日本大震災による津波被害は甚大 であったが、人災と考えられる要因も 多々あった。本論では自動車における 避難の是非について自己責任の観点か ら今後の防災のあり方について提案を 行った。
10. <学会シンポジウム 論文> 「子どもの課外活 動・放課後の安全」	单著	2014年6月 (平成26年)	人間工学 50(Supplement), S98- S99, 総2頁	昨今の就学児童をめぐる環境の変化 を踏まえ、子どもたちの課外活動・ク ラブ活動・放課後の活動に対する問題 を整理した。近年、学童保育での事故 が増加しており、学童保育を急速に推 進したことによる、人員不足・室内空 間の狭さなどの環境整備不足が原因と して挙げられた。

11. <雑誌寄稿論文> 特集 あなたは安全人間? チェックしてみよう	単著	2015年8月 (平成27年)	中央労働災害防止協会 安全衛生のひろば 56(8), 9-19頁, 総11頁	職場のうっかりミスは思わぬ事故になりかねない。職場で気を付けるべきポイントと対策を整理した。またこれまで事故当事者を責める傾向にあるが、過少報告につながりうる危険性もはらんでおり、短絡的な責任追及は再発防止にはならないことも明らかにした。
12. <雑誌寄稿論文> 「レジリエンス・エンジニアリング: 安全管理・安全教育のトレンドを考える」	単著	2017年7月	日本消防設備安全センター、 月刊フェスク (429) (20-27頁, 総8頁)	東京消防庁職員、消防士へむけた安全教育のための資料を提供した。特に人々のリスク認知特性について共有すべき情報を整理し、消防活動を行う際の留意すべき問題を提案した。(20-27頁, 総8頁)
13. <雑誌寄稿論文> 「人々のリスク認知特性を踏まえた今後の防災について」	単著	2017年12月	労働の科学 72(12) (722-727頁 (総6頁))	自然災害時の問題に主眼を置いて、人々のリスク認知特性と防災活動を進めるための問題点を整理した。 (722-727頁 (総6頁))
14. <雑誌寄稿論文> 「熟練作業者が陥りがちな心理: 安全行動調査から考える (特集 熟練作業者の安全行動)」	単著	2021年10月	安全と健康 72(10), 959-964, 総6頁、2021、 中央労働災害防止協会	熟練作業員・高齢作業員の安全行動・事故リスクを整理し、対策を紹介した。
15. <学会研究会報告> 「日常作業の「うまくいっていること」から学ぶ実践的取り組み: 第141回部門別研究会報告」	単著	2022年11月	産業・組織心理学研究, 第35巻第3号, 407-410, 総4頁、 2022, 産業・組織心理学会	労働災害防止のために成功体験を増やすといったポジティブ思考を検討する研究会での議論内容を整理した。(総4頁)
16. <雑誌寄稿論文> 「ヒューマンエラー対策、その前に: パーソナリティ&エラー傾向把握のススメ」	共著	2022年11月	安全と健康 73(11), 1062-1066, 総5頁、 2022、中央労働災害防止協会	よく知られている評価方法と安全活動を整理し、活動推進の前に正確な現況評価することの大切さを事例などを交えて紹介した。またアセスメント実施の際の注意事項も説明した。(総5頁)
(国際学会発表) 1. "The Development of "The Safety Training Program for 'IKI IKI' (Vivid) Five Senses" 共著者: 申 紅仙、 正田 亘	共著	1997年6月 (平成9年)	IEA '97 (International Ergonomics Association '97) in Tampere, Finland (国際人間工学会、フィンランド、タンペレ)	本論文の主な内容としては、教育安全プログラムの構成内容についての紹介にとどめている。構成内容は、論文6と同じ内容となる(全24種目のゲームから構成。また、プログラムは、月曜日から土曜日までの6日間を1週間単位とし、個人用12種目、集団用12種目(各2週間分)から構成。)

<p>2. “The Stepping-out behavior under the suddenly hazardous situation” -behavioral difference in latent left-handedness- 共著者：申 紅仙、正田 亘</p>	<p>共著</p>	<p>1998年8月 (平成10年)</p>	<p>IAAP '98 (international Association of Applied Psychology '98) in San Francisco, U.S.A. (国際応用心理学会、米国サンフランシスコ)</p>	<p>高齢者(57～68才)の緊急時の退避行動特性について調べた。若年者群(37名)と高齢者群(15名)の行動特性を調べると、若年者群は、環境変化に応じて退避方向を変えるが、高齢者群は若年者群に比べ、退避可能な空間がある方に退避しない者も多かった。また、高齢者群の反応時間では、男女間に明らかな差が無く、全体の傾向として若年群よりも反応が有為に遅かった。これらの結果は、高齢者は性別に関係なく、若年者に比べ緊急時にうまく反応できず、事故に遭いやすいことを示唆するものであった。</p>
<p>3. “A Study on Risk Perception -Attitude for Nuclear Power Plant and Risk Events, Before/After the JCO Accident-” 共著：申 紅仙、正田 亘</p>	<p>共著</p>	<p>2002年7月 (平成14年)</p>	<p>XXV ICAP(XXV International Congress of Applied Psychology in Singapore (第25回 国際応用心理学会、シンガポール)</p>	<p>JCO臨界事故前後の原子力発電に対する態度をtrade-off形式の調査で調べた結果、事故前群では原子力発電にほぼ好意的態度が窺えたが、事故後群では、事故前群に比べて、その肯定率の低下が見られた。しかし、これらの結果も有意差は得られず、予測に反し、原子力発電に対する強い反対態度は示されなかった。</p>
<p>4. WHEN AND WHERE DO PEOPLE FACE WITH HAZARDOUS SITUATION IN NATURAL DISASTERS?</p>	<p>単著</p>	<p>2003年7月 (平成15年)</p>	<p>International Ergonomics Association2003, Seoul, P.R. of Korea (国際人間工学会、韓国ソウル)</p>	<p>自然災害時の地域住民が体験する内容と体験場所を整理し、その特性を報告した。減災の可能性が最も高い体験は、「冠水した道路を歩いていて側溝の位置が分からず転びそうになった」などの移動中の体験であった。これらの体験情報を多くの住民が共有しあう必要性が明らかとなった。</p>
<p>5. SUDDEN HAZARDS: HOW DO WE BEHAVE?</p>	<p>単著</p>	<p>2003年7月 (平成15年)</p>	<p>Symposium Session), Proceedings of International Ergonomics Association2003, in Seoul, Korea</p>	<p>緊急時の人間の行動について、認知心理学的・安全心理学的立場から、入力段階(知覚・認知)・媒介段階(判断)・出力段階(実行)に分類しながら報告した。</p>
<p>6. "HIYARI-HATTO(incident) Map" --When and where do people face hazardous situation in natural disasters?</p>	<p>単著</p>	<p>2008年7月 (平成20年)</p>	<p>AHFEI 2008 (Applied Human Factors and Ergonomics 2008), 国際応用人間工学会、米国ラスベガス</p>	<p>自然災害におけるヒヤリ・ハット情報の活用方法について検討し、マッピングによるヒヤリ・ハットおよび災害体験情報マップを提案し、大分県別府市や静岡県熱海市のケース事例を紹介した。</p>

<p>7. “A survey on the anxiety of preschool children’s parents about nuclear power radiation risk and their decision makings, focusing on temporal changes of actions and free descriptions”</p> <p>8. (再掲) “A Brand-New Risk in Japan?—Risks of Industrial Accidents in the Age of Diversity Management and Their Countermeasures”.</p>	<p>单著</p> <p>单著</p>	<p>2014年7月 (平成26年)</p> <p>2018年8月 (平成30年)</p>	<p>ICAP2014:International Congress of Applied Psychology), Paris, France (国際応用心理学会、パリ、フランス)</p> <p>Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018) pp 363-369 (国際人間工学会、フィレンツェ、イタリア)</p>	<p>東日本大震災による福島第一原発事故後のリスク認知特性とその対応の持続性を調べた。対象は、子どもへのリスクに敏感とされる、幼稚園の保護者とした。調査の結果、震災直後から子供が口にする食べ物の対応(よく洗う)には持続性が見られたが、統制しづらい行動(外で遊ぶ)には柔軟な対応と評価が見られた。</p> <p>ダイバーシティ経営時代の労働安全リスクの中、女性活躍について重点的にまとめた。科学研究費で調査を行った親として子どもへの影響やキャリアについて分析結果を報告した。親が抱く子どもへの影響度と不安について子どもの年齢条件と共に調べた。その結果、子どもが小学生の時に最も影響度を感じており、同時期に最も高い不安を示した。今後のキャリア形成において参考とすべき問題をまとめた。*詳細は英文論文にまとめた。(英文論文参照)</p>
<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 「作業現場におけるコミュニケーションに関する一考察—2つの建築現場のK Y Mから—」</p> <p>2. 「医薬品名称の類似性と混同に関する実</p> <p>3. 「自然災害におけるヒヤリ・ハットの有</p> <p>4. 自然災害におけるヒヤリ・ハットの有効性について (2)</p> <p>5. 「平仮名とハングルの書字スリップに関する研究」</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2001年10月</p> <p>2002年6月</p> <p>2002年</p> <p>2003年</p> <p>2003年</p>	<p>産業・組織心理学会第17大会発表論文集 166-169頁</p> <p>日本人間工学会第43回大会</p> <p>第4回日本災害情報学会学術研究発表大会</p> <p>日本災害情報学会第5回研究発表大会予稿集, 167-170.</p> <p>2003, 日本心理学会第67回大会発表論文集, 654.</p>	<p>K Y M (危険予知ミーティング) の良好なコミュニケーションを成立させるための留意点について考えた。2グループのK Y Mを比較した結果、Aグループのほうが優れていた。同グループ職長は、成員の記憶保持率を高めるよう、まとめを行っていた。また、Aグループは年代の混在する職場であり、高齢作業員が若手作業員の面倒を見るために積極的に参加していたことが明らかになった。</p>

6. 「自然災害の中のヒヤリ・ハット体験 —山口県宇部市を対象にした高潮災害のケース—」	共著	2004年	日本応用心理学会第71回大会論文集
7. マッピングによるヒヤリ・ハットおよび災害体験情報の共有化について—福岡市博多区を事例に—	共著	2005年	日本災害情報学会第7回研究発表大会、京都大学宇治キャンパス 木質ホール（京都府）
8. 自然災害体験およびヒヤリ・ハットの情報共有方法についての検討—静岡県熱海市を事例に—	単著	2007年9月	日本心理学会第71回大会
9. 自然災害体験およびヒヤリ・ハットの情報共有方法についての検討(2)—大分県別府市および由布院を事例に—	単著	2008年9月	日本心理学会第72回大会
10. 小集団討議に基づく人間工学ロードマップ策定の試み (大橋 智樹, 水野 基樹, 榎原 毅, <u>申紅仙</u> , 堀野 定雄, 小木 和孝, 酒井 一博, 岸田 孝弥)	共著	2008年6月	日本人間工学会大会講演集 44spl(0), 132-133, 2008
11. 人間工学ロードマップの効果的な目標設定における参加型手法の利点 (榎原 毅, 大橋 智樹, 水野 基樹, <u>申紅仙</u> , 堀野 定雄, 小木 和孝, 酒井 一博, 岸田 孝弥)	共著	2009年	日本人間工学会大会講演集 45spl(0), 506-507, 2009
12. 「東日本大震災後のリスク認知に関する一考察—福島県出身者と茨城県在住者(当時高校生)を中心に—」	単著	2018年6月	日本人間工学会誌 54(Supplement), 1F1-1-1 (総2頁)

(演奏会・展覧会等)				
1.				
(招待講演・基調講演)				
1. (再掲) 「自然災害と人間工学」	単著	2011年4月22日	人間工学専門家認定機構講演会2011年4月22日開催(会報は、人間工学専門家認定機構 会報 Vol.27,1-4頁)	2011年東日本大震災の被害状況説明と今後のリスクについて、また人間工学が貢献できる問題について整理した。
2. 「自然災害：防災の取り組みと今後」	単著	2011年5月21日	安全人間工学研究部会第5回研究会(認知心理学学会安全心理学部会と共催)	2011年東日本大震災を受け、風評被害・リスク認知について考えたうえで、これまでなされてきた防災研究について紹介した。防災において事前の情報共有が大切であり、コミュニティづくりの有用性についても紹介した。
3. (再掲) 「東日本大震災被災者の経験から(3)～茨城県(水戸市を中心に)～」	単著	2011年12月	産業・組織心理学会第103回作業部門研究会「東日本大震災被災者の経験から」(報告は、産業・組織心理学研究 Vol.26(2) 177-183)	被災地域の研究者として、地域の状況をどのように捉え復興に役立てていくのか。といったテーマによって茨城県での活動を中心に話題提供を行った。
(受賞(学術賞等))				
1. 平成11年度 日本応用心理学会「学会奨励賞」受賞		1999年度	日本応用心理学会	論文名「潜在的利き性からみた退避行動」

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表、分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1. 「人間の基本的回避方向に関する実験的研究」	実験実施・研究取りまとめ：申紅仙 研究代表	平成8年度 科学研究費基盤研究(A)	平成8年度	科研費	2,260万円 (2年度)	平成8年度科学研究費基盤研究(A) (1996年度～1997年度) 課題番号：08401006 実験実施・研究取りまとめ：申紅仙(修士・博士論文研究テーマとして研究)
2. マッピングによるヒヤリ・ハットおよび災害体験情報の共有化についての検討	研究代表	平成18年度 科学研究費補助金(萌芽研究)	平成18年度 (2006年度)	科研費	340万 (3年度)	課題番号：18651085 平成18年度科学研究費補助金(萌芽研究)(平成18年度～20年度) 研究代表者：申 紅仙、連携研究者：中根和郎 災害体験を地図上にプロットする方法を用いて災害情報の共有方法の有効性を検討した。

<p>3. 親の放射線不安およびリスク認知が育児環境におよぼす影響について</p> <p>4. 横断歩道における歩行者の優先性を実質化するトラフィックヒエラルキーにかかる研究</p>	<p>研究代表</p> <p>分担研究者</p>	<p>平成28年度科学研究費補助金 基盤研究 (c)</p> <p>科学研究費：基盤研究 (C)</p>	<p>平成28年度(2016年度)</p> <p>令和3年度(2021)3年度計画</p>	<p>科研費</p> <p>科研費</p>	<p>455万(3年度)</p> <p>2021年度 10万円 総額416万(3年度)</p>	<p>課題番号：16K01879 平成28年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）(平成28年度～平成31年度(令和元年度))</p> <p>研究代表者：申紅仙</p> <p>2011年3月に発生した福島第一原子力発電所事故により、子ども(特に就学前後)を持つ親が新たに抱くこととなった放射線不安について調べる。</p> <p>課題番号：21K04569 令和3年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）(令和3年度～5年度)</p> <p>研究代表者：加藤麻樹</p> <p>無信号横断歩道で歩行者が優先されない理由を明らかにすることを目的とし、交通事故対策の着眼点 4E：規制,技術,環境,教育の観点から,国際比較調査を実施し、課題解決策を構築して我が国のトラフィックヒエラルキーの指針として提案する。</p>
<p>(競争的研究助成費獲得(科研費除く))</p> <p>1.</p>						
<p>(共同研究・受託研究受入れ)</p>						
<p>1. リサーチアドバイズおよび共同研究</p> <p>2. 風水害防災情報システムの開発</p> <p>3. 地域防災力の向上に資する災害リスク情報の活用 共同研究</p>	<p>リサーチアドバイズ 共同研究</p> <p>共同研究</p>		<p>2001年度</p> <p>2004年度より2006年度</p> <p>2006年度</p>	<p>佐藤工業株式会社</p> <p>(独)防災科学技術研究所</p> <p>(独)防災科学技術研究所</p>		<p>(建設現場におけるKY活動の効果的な進め方について観察調査実施)</p> <p>(「災害体験情報共有システムの開発」) 共同研究者</p> <p>過去の災害情報や災害体験・ヒヤリハット体験等を検索できるデータベースを構築した。このデータベースは、現在、防災科学技術研究所ホームページで公開されている。</p> <p>災害に強い社会の実現を目指し、自治体や住民、NPO等との社会実験を通じて、各種災害リスク情報を相互に利用する仕組みや、参加型のリスクコミュニケーション手法について開発するとともに、地域コミュニティや社会ネットワークの共助による被害軽減方策や応急対応方策などのリスクガバナンス手法について実践的に研究する</p>

4. 「不安全行動を科学する」	講演前調査協力およびアドバイス・データ入力協力		2016年度-2017年度	積水化成工業株式会社		不安全行動調査項目作成にあたって項目内容確認、調査実施アドバイス、データ入力協力、結果分析・フィードバック
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1.						
(学内課題研究(共同研究))						
1. 視線によるウェブ・ユーザビリティ評価の検討	研究代表	-	2006年度-2008年度	-	6000千円	人がインターネット情報を取得する過程を視線分析によって明らかにし、ユーザビリティ評価との対応性について検証することを目的とし、実験を試みた。尚、実験には、被験者の負担を軽減させる、非装着型アイカメラ(ナック社 非接触アイマークレコーダー EMR-AT VOXER)を使用した。
2. 視線によるロールシャッハ刺激の評価特性と投影結果の妥当性について	共同研究	-	2009年度	常磐大学	1297千円	ロールシャッハ刺激に対する投影結果と視線停留特性の比較を行った。非接触型アイカメラ使用。全体傾向として、刺激中央部への停留傾向が見られ、中央部にインクプロットがあるときには特に強い傾向が示された。またどのように見えるか(クマ、蝶など)によって停留箇所の違いが確認された。
(学内課題研究(各個研究))						
1.	-	-		-		
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.	-			-	-	